

国武 絣

【国武絣について】

久留米絣は、地域によつて特色ある絣が生みだされました。その中に、現在の八女市国武地区で始まったとされる「国武絣」（くにたけかすり）があります。久留米絣の中でも、小絣（こがすり）という小さな文様が特徴の経絣（たてがすり）です。

【牛島ノシ（能之）】

国武絣を編み出した牛島ノシは、文化九年（一八一二年）、八女市稲富の農家の次女として生まれました。弘化三年（一八四六年）ころ、織り締め技法の元となった絣糸を編んで作る技法を編み出したといわれます。

ノシがある日、農夫が煤で黒くなった編菰（あみごも）粗く織ったムシロ）を解いているのを見ると、縄目の跡がくつきりと白く残っていました。彼女はこれをヒントにして、絣糸をタ

テ糸のみ使用した独特の小さな柄模様の小絣を考案しました。この絣は「コの字」「みじん」などと呼ばれ、「屋根板絣」とも呼ばれました。これはノシが三十四歳のころだといわれます。

小柄絣の評判が良く、次第に人気が出てノシの家には、習いに来る女性が多くなりました。その当時、この付近の多くの女性が、国武絣に従事したといわれます。

ノシは、普通の織子さんが月に四、五反しか織れないのに、月に八反織り上げました。そのため、彼女の家は村人から「八反屋」と呼ばれ、その絣を地名から「国武絣」と呼ぶようになりました。

小柄絣の「亀甲」（きつこう）「みじん」「子持ちキの字」「並十字」など、量産化に成功したのは、牛島キクノ（ノシの孫）でした。当時は小柄の緯（よこ）糸くくりは手で編んでいました。孫のキクノはのちに、現在の八女市亀甲に住んでいた

斉藤藤助（さいとうとうすけ）と結婚しました。

藤助はキクノが絣ムシロを手針で編み能率が大変悪いのを見ました。

「※ムシロ（筵）とは、藁（わら）やイ草などの草で編んだ簡素な敷物で菰（こも）とも呼ばれ、代表的な製品にござがある」

そこで考案したのが、機械による括（くく）り作業で、機械に改良したのが夫の斉藤藤助でした。

この織貫機の発明により、小柄絣の量産化が進み、作業能率が二十五倍に成長したと郷土史にあります。

「※緯機械の作業は、今日では織貫（おんぬき）と呼ばれ、広川町の久保田東さんが足踏機で続けられています。」

ノシの幾番目かの孫（キクノの弟）に牛島喜次郎（うしじまきじろう）というひとがいました。この人は経糸だけを機械で編み、絣糸を作り出す方法を考案し、特許を明治三十一年八月にとりました。当時は「経絣絞器械」とよばれました。百立な

どの極小柄「十字」「サの字」の生産が軌道に乗ったのはこの機械の発明に負うところが大きいといえます。

「※現在の織経職は前記、久保田さんの近くに住む杉山高さん一人となりました。」

絣糸を経糸だけに使っているので、生産効率が良かったものの、大正時代の末には残念ながら絶えています。しかし現在でも、久留米絣の小柄のものを「国武絣」と呼んだりします。

小柄の絣糸を作る手括りのほかに織締（おりじめ）のやり方があります。一反ムシロに織る方法で、経糸の絣糸づくりを織経（おりだて）といい、緯糸の場合を織貫（おんぬき）といいます。

「※立（たち）：着尺幅（約三十七センチ）の中に織りこまれた柄の数。」

（文：s・H）

【参考資料】

○「久留米絣」 財団法人久留米技術保存会 編集兼発行
○「郷土の文化財」発行 久留米市教育委員会